

ダイバーシティ海外派遣報告

保健学研究科 小寺さやか



1



派遣機関の概要

- 派遣先: Charité – Universitätsmedizin Berlin, Institute of Health and Nursing Science, Germany
- 派遣期間: 2019年11月19日～12月17日
- Charité – Universitätsmedizin Berlinは、300年の歴史を持ち、EUで最大規模の大学病院を有する医科大学。ロベルト・コッホやルドルフ・ウィルヒョウ等の医学史上に名を残す研究者を輩出し、かつて森鷗外や北里柴三郎も留学していた。
- Institute of Health and Nursing Scienceは、Charité – Universitätsmedizin Berlinがベルリン市内に持っている4つのキャンパスのうちの1つに位置し、コメディカル(看護師、助産師、理学療法士、言語聴覚士など)を対象とした修士課程がメインの大学院である(ただし、2020年から看護学士のBachelorプログラムを開始)。

2

Charité - Universitätsmedizin Berlin



全雇用者数: 17,000人(国籍は100か国以上)
看護職: 4,500人、研究者: 4,000人
病床数: 約3000床
外来患者数: 700,000人、入院患者数: 150,000人(年間)
クリニックと研究機関: 100か所



3

ダイバーシティマネジメント

● 教員数

	女性数	全体数	女性比率
教授(部局)	1	2	50.0%
教員(部局)	13	15	86.7%

- 看護系大学院であるため、教員・大学院生ともに女性の比率が高いことが特徴。特に子育て世代が多く、子どもを連れて受講する院生も複数名いた。女性トイレにはベビーベッドやオムツ替えに必要な物品が揃っており、環境的にも配慮されている。
- 男女問わず全員定時に帰宅するルールが徹底されている。また、法律により有給休暇(30日)の取得が義務付けられている。業務は教育、研究、委員会活動等をそれぞれ3分の1の割合で遂行することが推奨され、効率的に働くことが推進されている。

4

滞在期間中の研究活動

- シャリテ・ベルリン医科大学病院看護部への訪問と病院見学
- ドイツのヘルスケアシステムと主要健康課題に関する情報収集と研究者（公衆衛生）へのインタビュー
- ドイツのImmigrant Healthに関する研究者（社会医学）へのインタビュー
- ドイツの看護教育に関する情報収集とドイツ看護協会（DBfK）への訪問（Community Health Nursingに関するディスカッション）
- 大学院生の研究ゼミ（Michael Ewers教授）と海外訪問者による特別講義（Nurse Education at Turku University）等への参加
- 研究に関する情報交換 など

5

研究交流の紹介

- 欧州一の移民大国であるドイツのシャリテ・ベルリン医科大学では、多様な民族的背景を持つ患者のケアに携わる医師や看護師、ソーシャルワーカー等医療スタッフの多文化対応能力の向上を目的としたトレーニングプログラム（IPIKA）を実践。



- シャリテ・ベルリン医科大学病院看護部を訪問し、IPIKAの具体的な内容に関する情報収集と日本での取り組みについて、Ute Siebert博士らと意見交換を行った。



- 2020年3月にシャリテ・ベルリン医科大学のUte Siebert博士を講師とし、日本人看護職を対象とした共同セミナー※の実施につながった。

※JSPS(A)「世界をリードするインバウンド医療展開に向けた看護国際化ガイドライン」(研究代表者:野地有子)の一環として実施した。

6